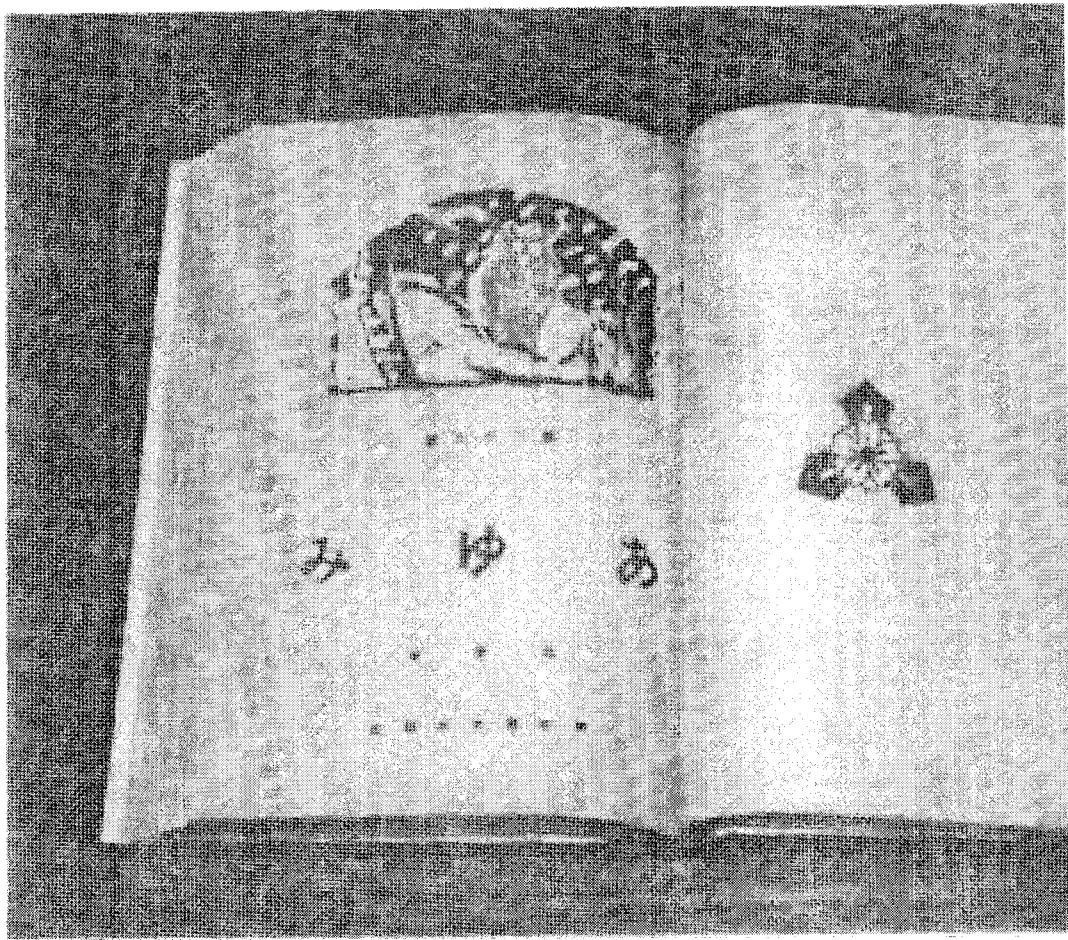


第六章 《参考》

* 横手尋常小学校文集『歩み』の残したもの

☆2003年に発表。やや長文なので、
「」では部分的にカット、また
は要約したものを「参考」とし
て掲載したものです。



目次

「せじめに」

- 「はじめに」

「横手尋常小学校」のこと、文集「歩み」のことと
文集「歩み」19号の教師の「断想」とその時代
文集「歩み」（19号～31号）の内容概観

文集「歩み」の残したもの

① 童謡から児童誌へのスタート

② 繰り方このよきもの

③ 「調べる綴り方」のことなど

：綴り方作品から学ぶもの

「おわりに」

* ○印は採録、または要約したもの。・印分はカット。

*はじめに

文集は、子どもと教師が生み出す、学校・地域の文化財のひとつといえます。それに時代がふかくかかわるとなれば、その文化財的価値もおのずからといえましょう。

いま、手もとに横手尋常小学校の学校文集「歩み」（昭和14年・No.19、31）全冊十七冊があります。この全冊を保存所持されている方が土屋昭郎氏（現湯沢市湯ノ原1-2-36）です。同校入学が昭和9年（廿四）、ちょうど文集「歩み」19号が発行された年で、最後の同31号は昭和14年（廿九）。発行で五年生のときです（昭郎氏と筆者とは一年から六年まで同級生）。土屋昭郎氏が、一年生から五年生までの自分を含めたたくさんのなかまの成長の足跡を、その全冊をひとつそりとしかも大事にだいじに保存されてきたことにおどろかされます。もうおひとり、市内羽黒町・柿崎了氏（故柿崎かくじ先生のご子息）からも、全冊に近い十六冊をお借りする

ことができました。文集編集者のおひとりでもあつたかくじ先生が、ていねいに合本され、いかにも愛し子を慈しむかのよう、ていねいに保存されていたことを知られます。31号の一冊が欠けているのはどうしてなのか不明のままであります。

まず、柿崎了氏からNo.19～30号をお借りしてコピーをとり、欠けているNo.31号は土屋昭郎氏からコピーしたものを持ちました。学校・地域の文化財がたいせつに保存されていることはうれしいことです。なお、文集「歩み」創刊のことなどは次の項で触れます。

さて、この一文では、文集のよしあし、編集のよしあしといったことを述べようとするものではありません。学校・地域の文化財としての子どもたちの詩や綴方（作文）などを少していねいに読んでみようということが主たる内容となります。それと、文集「歩み」の発行された昭和初頭の時代とふかくかかわることもだいじにみていただきたいことです。子どもの作品といえど時代の産物といえますから。

時代とふかくかかわるという一例に、たとえば次のような作品があげられます。正確には綴方とはいえないのかも知れませんが、文集「歩み」28号（昭12年12月27日発行）に掲載された作品です。

えんどうせんせい

一青 後藤慶助

ぼくは、えんどうせんせいのおはなしをきく時、なみだが出ました。きやうしつにはいる時、はらがどきどきしました。そうして、えんどうせんせいがしないでくれればよいと思いました。

これは、『祝応召征途・祈武運長久 遠藤訓導』の特集号を飾る学年代表のなかの一編で、ふつう、書かれた綴方・行事作文といわるものの中のひとつです。一年から六年までのそれぞれの代表は、遠藤先生を送る式のこと、駅での見送りのことなど、この号の特集にふさわしい文を書いています。

この遠藤先生の出征ということとはもちろん時代とかかわることで、子どもたちはそれぞれ勇ましいことばを選んで、出征を祝い、武運長久を祈るという文がふつうですが、ここに引用した「えんどうせんせい」の文はちょっと違います。勇ましさを勇ましさとして受け止めてはいても、からだのふかいところで「なみだが出ました」と、ひとりの人間の心に響いたこととして受け止めていることです。それに、「はらがどきどきしました」というのも、胸のふるえをからだ全体で感じ取っているからといえましょう。圧巻は、「しないでくれればよいと思いました」！人間であることのそのふかさから発したぎりぎりのことばの噴出。そのための「なみだ」であり、「どきどき」であつたことがわかります。自分がことばで書く、とはこういうことでしょう。短いが故に、まるで一編の詩のような感じがしないでもありません。

書かされていながら、じつは確かに書き切つてある例といえましょう。このように、子どもの作品のなかに時代を見ることが出来るとともに、時代を貫徹するともいえる、ふかい真実のことばを知らされるのです。時代の変動のなかにあっても、人間人間らしい子どものことばにおどろかされるのです。（中略）

文集からの引用作品は原文のままとしました。当時の表記そのままです。それに一年生は、カタカナがひらがな学習に先行した時代です。また、漢字も当時のままとしました。

一、横手尋常小学校のこと、文集「歩み」のこと

横手尋常小学校はいまの横手市南小学校の前身校で、ふつう、男子小学校ともいわれました（もうひとつ女子小学校は、もと横手市北小学校の前身校です）。明治・大正・昭和と歴史を刻んできたこの学校の創立は古く、『横手尋常小学校沿革概要』は次のように記しています。

「明治七年（一八七四）、学制実施ニ基キ、同年二月十九日始メテ

小学校ヲ創立セリ　當時寺町西誓寺ヲ借りテ校舎ニ充テ
育英之校、名尔斯。　兒童數三十六名

育英学校ト名称アキラハ童数三十余名

初め育英学校、のちに横手小学校ともいわれたようで、明治の初めの頃の学校制度の変遷はめまぐるしく、『沿革概要』によれば、町の学校の合併や分離など数度におよび、そのまま時代の変転を映すかのようです。ここでは、「在学児童数ト学級數調べ」で、大まかに学校の変遷をみておくことにします。

在學兒童數ト學級數調
創立當時ヨリ兒童數比較

創立の頃は「女」（女子生徒）の数はみられず、そのあと男女の生徒数の合計が八〇〇名（でも女子生徒数はたいへん少なく）であつたり、さらに「女子部分離」があつたりしたのがわかります。——にもめまぐるしくうごく時代の姿を見ることができます。

昭和三年（一九二八）の一二六学級は特出し、ふつう、一二三～一四学級のよう
です。ということは一学年四学級ということで、一学級の平均児童数は
なんと六十人を越えます。全校児童数約一、五〇〇人、一四学級一マン
モス学校といえなくもない学校規模であつたことがわかります。

この大規模校に学校文集「歩み」が発行されていました。

発刊は大正十五年(一九二六)とされるのですが、その創刊号から十八号までは、いまのところ不明のままです。どこかにひっそりと眠っているに違いありません。それに、31号までの発行は確認できるのですが、それ以後のものについても不明です。おそらく発行できなかつただろうと思われます。こうしたことも時代とふかくかかわるのでないかと考えられます。

現横手市南小学校に、この「歩み」全冊が残され、保存されていないかどうかを、平成15年一月、佐藤民雄校長先生におたずねしたところ、書庫、そのほかをたずねても見つからない旨、「返事いただきました。なんとも残念なことです。

文集「歩み」の19号～31号までを年度別にしてみると次のようです。

昭和	九年度(一九三〇)	19号	☆20号	21号
"	十年度(一九三一)	22号	☆23号	24号
"	十一年度(一九三二)	25号	26号	29号
"	十二年度(一九三三)	30号	*31号	

☆印の号は、低・中・高の三分冊。

*この31号分は土屋昭郎氏所有のものから
お借りしました。

(…略…) 時代の出来事を並べてみると次のようです。

昭和六年(一九三一)満州事変勃発、東北地方冷害…、昭和八年(一九三三)日本、国際連盟を脱退…などに続くのが、

- 昭和9年 • 離村婦女子一万一一八二人…。
- この年、東北大凶作。
- 女子身売り多発し、防止につとめる。
- 県内各学校長に対し、国体の本義を名徴にすべき旨を通達する。
- 一二・二六事件おこる。
- 蘆溝橋事件おこる。
- 國家総動員法公布。
- 国民徵用令公布。
- 太平洋戦争始まる。

(「秋田県の歴史」巻末年表より)

文集「歩み」は、こうした時代を歩んできたのですが、この「歩み」の創刊をつたえてくれているのが、25号の学校長の「ご挨拶かたがた」の次の二文です。

さて、本誌「歩み」が呱々の声を上げましたのは、大正十五年七月で有りまして、本年、丁度創刊以来満十周年です。「這えば立て、立てば歩め」の親心が、うまく実現して、本号は二十五号といふ血氣盛りに成長致しました。

学校の状況報告、受持からの希望通信、鑑賞用文集等の欲深い使命の嬰児の「歩み」でしたが：

創刊の大正十五年にについて触れていますが、どのような意図・ねらいがあつてのことだつたかについては不明です。この25号の発行された昭和11年頃の「歩み」の発行の意図・狙いについてはさきの一文からも伺うことが出来ます。第一に「学校の状況報告」、第二に「受持からの希望通信」、第三に、本来の「鑑賞用文集」が狙いであることをいつています。

特色は、一にも二にも「学校側からの報告・希望」をだいじな柱にしているのですが、実際の仕事にあたる編集者たちは、たくさんの作品を掲載すること、多くの子どもの出番をこそ大きな眼目にしていたようです。例えば次の「編集後記」に編集者の願いが明らかです。

* 編集後記

：「歩み」は色々御家庭の事情等を考慮して、三銭切手一枚の値段でつくつてゐるのですが、内容も、体裁もこの値段ではギリギリです。どうか、この旨お含みの上、お子さまのよき伴侶としてご利用下されたうござります。

尚、学級の子供一人一回は、必ず卒業までには出るやうにと考へて編輯して居ます。

若し、お子さんの文がのつてゐたら保存して子供さんの「小さい記念」として置かれますやう併せてお願ひ

いします…。(後略)

一 柿 崎 一

「文集一冊三錢」という編集。発行事情の一端がのぞくのですが、
(…中略…)
また、編集者の次のことばも印象的です。

「……学級の子供一人一回は、必ず卒業までには出るようにならねば」として胸にひびくのですが、なにしろ大マンモス校、
とうていかなわぬとして、その意氣やもつて知るべしと言えましょう。

四、文集「歩み」の残したもの

(1) 童謡から詩へのスタート (要約したもの)

全校文集「歩み」のなかでの詩作品の数は、少ないのですが、それを童謡といつたり、また、詩といつたりなど、ことばのうえでも指導のうえでも混在をみせます。でも、これは児童詩教育の発展過程のもつひとつ姿、その現れといえなくもないでしよう。

時代を少しきかのぼって、大正デモクラシーの高揚期、童話・童謡雑誌「赤い鳥」(鈴木三重吉)の運動が全国的にひろがります。明治以来の概念的な綴方、また美文調を排して、文芸的に高めた功績は高く評価されています。童話・童謡に新風を送り込み、とくに大正13年(一九二五)頃は童謡全盛時代を築きあげたほど。文集「歩み」の創刊とされる大正15年(一九二七)と、「赤い鳥」運動・童謡全盛時代とのかかわりの大きさは切って切れないものがあったに違いありません。

「歩み」19号の発行にしても、それからわずか八年後。童謡が文集に

たくさん登場するのもうなずかされましょう。教師の指導・奨励の外に、当時の幼年雑誌などの影響の大きかったことも考えられます。学級のかでは、雑誌を購入してもらえる家庭、それを読める階層の子は多くはなかつたし、そうした子どもから借りて読む子ども、順番待ちする子どもいたものでした。童謡を読む、書くといったことは、雑誌による影響の大きかつたことは確かといえます。（…中略…）

「歩み」20号に初めて「参考詩」として、詩ということばが登場。これは指導のために用意されたもので、「これが詩です」、「こんな詩を書きなさい」：そのためのものであることがわかります。

① 父さんかへったな

あ

お靴と

あのぼうし

父さん

おかへりだ。

ここまでこゑが、

してゐるよ。

大きなこゑで母さんが
笑つてゐる。

（雑誌「綴方教育」より）

② 雨上りの庭

（熊本県五年生）

雨上りの庭の

明るさ

ばらのつぼみが
はちわれさうだ

（出典）

①②ともに児童自由詩といえるもの。その②などは、文芸的・感覚的な詩といえましょう。昭和初年代、「歩み」は早くもその20号で、童謡から決別した児童詩を掲げていることは、新しい児童詩の指導をそこにみていたこからに違いありません。

①の詩は、教育誌「綴方教育」（菊地知勇）からのもので、当時のもつとも進歩的な教育研究誌で、「赤い鳥」綴方・童謡を正攻法で批判したとされます。知勇は岩手出身、「歩み」も、おなじ東北の血の騒ぐのを感じたものだつたのかも知れません。

中央のすぐれた研究水準に伍していくとする、地方での研究意欲もさかんになり、地元秋田でも、「北方教育」（成田忠久・滑川道夫）が活躍をはじめたのも昭和初年代でした。

文集「歩み」には、まだまだ「赤い鳥」風童謡が掲載されていくのですが、これは直接的な理由としては、文芸主義・童心主義に徹したものとして、まずは読むことにそのねらいをおいたものと思われます。「赤い鳥」風童謡に決別し、新しい児童詩を標榜したのでしたが、その具体的な指導にまでは手がのびなかつたのかも知れません。

21号に「詩」として「参考詩」のように掲載された次の詩があります。

③ 雪ヨフレフレ

一 白 中 西 健

(一) 雪ヨ フレフレ
モットフレ

アタゴノ 山モ

オシロノ 山モ

白ク白ク

マツ白ニ ツモレ

(二) 雪ヨ フレフレ

モットフレ

デコモ カシコモ

マツ白ニ

スキーガ ヤレルヨニ

フツテクレ

④ カンネンブツ

一白 土屋 昭郎

マイバンマイバン

カンネンブツノ

ホッケタイコガ

トホテイク

ドンドコ ドンドン

ドンドロドン

③の「雪ヨフレフレ」の詩の「アタゴノ山モ／オシロノ山モ」には、生活に根ざしたリアルさを感じさせられるのですが、指を折って調子をそろえての、これは童謡です。④の「カンネンブツ」は、一見童謡風なのですが、これは児童自由詩と言えなくもないでしょう。なにより自分のからだでとらえた生活感躍如、新鮮さが光ります。

③と④とを『参考詩』として、童謡と、児童詩とを並べたと見ることもできて、そこにこの時代の詩運動のゆれうごく一端をかいま見る」とができます。

「カンネンブツ」のような生活をふまえた、自分のことばで書く詩がたくさん生まれていったらと応援したくなります。

26号になると次の詩が出てきます。

⑤ 軍馬市

四青 高橋 良治

朝早く

馬のひづめが
ぱかぱかと

けたたまし

今日は軍馬だ

秋晴れだ。

当時の横手の町の「軍馬市」があざやかに切り取られています。ただ単に「軍馬市」の活況を眺めているだけでなしに、「今日は軍馬だ／秋晴れだ」の終行に結実される、対象にからだごとぶつかっているその一体感が健康的でまぶしいばかり。しかし、軍馬に象徴されるように、時代は戦争への道へ転げこんでいってしまいます。

この項の終わりに、文集「歩み」の生み落としたもうひとつ詩をあげたいと思います。これは27号に綴方としてのつてているのですが、この綴方作品をこそ詩として評価したいのです。

⑥ エンソク

一白 佐藤就一

ニギリママヲ モツテイキマシタ。
タマゴモモツテ イキマシタ。
カシモ モツテイキマシタ。
センベイモ モツテイキマシタ。
スシママモ モツテイキマシタ。
グリコモ モツテイキマシタ。
タクサン モツテイキマシタ。
ムカウノオヤマニモ イキマシタ。
テッキヤウモ ミマシタ。
キシャモ ミマシタ。
オホキナマツノキノシタヲ トホツテ
カヘリマシタ。

*評 コンナニタクサンモツテイキマシタカ。

ドンナニオイシカツタデセウ。

こんな詩なら、どんな子どもでもわいわい書けるのではないでしょ
うか。

「モッテ イキマシタ」の八行に及ぶリフレイン！ 遠足のよろこび
そのものの強調です。なんとも自然な……。思いだしてもうれしいよ
こびが鉛筆を走らせているのです。「ムコウノオヤマニモイキマシタ」「
…ミマシタ」「ミマシタ」とリフレインをかさねて、遠足の充実感を
もりあげ、終行の「カヘリマシタ」のなんともいえない余韻がかわいら
しい。

これが戦後、児童詩の主流にとって代わる散文詩風な先駆の一編とし
て、すでに誕生していたことを知らされるのです。

文集「歩み」が時代にさきがけて、新しいひとつつの詩のタネともいえ
るものを作り落としていたと言えます。

(2) 練方二のよきもの

…… 残された綴方作品から学ぶもの ……

文集「歩み」の綴方作品は、特集号などにみられるように、どうして
も行事作文に左右されることが多かったといえるし、あわせて学校規模
がマンモス校という物理的な要因からおこる、できるだけ多くの子ども
の作品をのせたいという編集上の意図からしても、どうしても短い作品
でという制約で苦しんだのではないかと思われます。数編をのぞいて、長
い作品が極端に少ないことが目立ちます。すぐれた作品にとって長短は
問題外だとしても、やはり気になるところです。（…中略…）

ここでは、文集「歩み」が當々と歩んできた一千点をこえる綴方作品
のなかから、いまのわたしたちに残された貴重な財産として、そのいく
つかをみていくことにします。

ヒガシノ空カラマンマルイオ月サマガノボッテ来マシタ。ニコニコトシタオカホカラ、キレイナ光リヲ出シテ、ボクタチノセカイヲテラシダシマシタ。ボクノウチノオニハモソレカラオエンガハノススキモ、パアツトアカルクナリマシタ。「オ月サマガ出タ」トイツテ、カケコンデ来タアツ子ハ、オソナヘモノノマヘヘ、スハツテ、ジットオ月サマヲミテキマシタガ「オカアチヤン オ月サマ、オテテモアンヨモナイノ」と、フシギサウナカホヲシテ、オマメヲモツテ来タ カアチヤンニタズネタラ、カアチヤンハ、ワラヒナガラ 「アンマリトホークテ見エナイノ、オカホハ大キイカラ見ヘルノ」トオシヘマシタ。ソレカラミンナデオ月サマヲ、ヲガンデ、オイシイオマメヲタベマシタ。

(文藝「夢」20号・昭和の年発行)

書きたいこと、綴らねばならないことが、からだのなかにうずうずして爆発でもするかのように一気に書きあがつた感があります。観察がよくなはたらいて、ときすまされた感覚のはたらきが飾ることなしに、素直に生き生きしいばかり。対象に（オ月サマに）まっすぐに向き合えているからでしょう。

「ニコニコシタ オカホカラ、キレイナ光リヲ出シテ、ボクタチノセカイヲ テラシダシマシタ」

語彙の豊富さにおどろかれます。まるで、お月さまが作者の心の中をまで照らし出すかのようです。妹のことばからうけた「十五ヤ」の明るさ、楽しきの一点にしぼり切つて書ききった力は、一年生ならではの純粹さ、ひたむきさをもとにしているからでしょうか。

ボクハユウベオマツリヲ見ニ行キマシタ。オトウサン、
オカアサン、オトウトイッショニイキマシタ。

トチュウデオトウトハ「トンボノフウセン玉ヲ買ッテ
クレ」トイッテコゴトヲイヒマシタ。

オカアサンハオトウトニ買ッテヤリマシタ。オトウト
ハヨロコビマシタ。チョシティルウチ「バン」トヤブシ
テシマヒマシタ。アタリノ人タチハビックリシマシタ。
ボクモボクノカアサンモビックリシマシタ。オトウトハ
ヨロコンデキマシタ。

ソレカラマチヨミンナマハツテウチヘカヘツテネマシ
タ。

ヨガアケマシタ。オトウトハ田ヨサマシテ「アレガナ
イ、アレガナイ」トイッテナキマシタ。

ボクノオトウトハカハイイオトウデス。

(文藝「夢」30号・昭和13年・7卷)

二年生で、こんな綴方が書けるとはおどろきです。

なんといっても題がいい。ふつうは「オトウト」なのですが、「ボク
ノオトウト」としたところに、この綴方の主題がかくされているのがわ
かります。

子のことは、この文の「形」ともかかわっています。「ひとまとまり
の文」のかたちの、「はじめ」「中」「おわり」が段落として、きちんと
と書き分けられていて、「おわり」での「ボクノオトウトハ カハイイ
オトウトデス」に、「ボクノ……」とした主題が生きています。

「中」での「コゴトヲイヒマシタ」「ヨロコビマシタ」につづく「ト
イッテナキマシタ」と終わる「オトウト」の行為・そのようすに、その
オトウトをじっとみつめて、オトウトと一緒になっている作者のやさし
さがわかります。やしさは、人間的なぬくみとして、文の「はじめ」
「中」「おわり」に一貫して流れているのがわかります。

それに、「コゴトヲイヒマシタ」「ヨシマシタ」と日常語、また方
言で書いているのですが、そこさばでしか表しようがなかった、ぎり
ぎりのことばの選択がすばらしいといえます。ここにどんなことば

が必要でしょうか。方言でしか表し得ない、オトウトのかわいらしさが込められていて、するどくふかい表現となっています。

すぐれた綴方を書いた作者の力もさすがですが、それを書かしめた文

集「歩み」の確かなあしあとをみる思いがします。

暮らしきを見つめ、じぶんのことばで書く、綴ることのみごとな結実があるといえましょう。

ひよこ 四青 出雲慎夫

毎日にはとりが卵を産んだので、五十個以上になりました。四號のにはとりは卵をみな産み終つて「こゝこゝ」とないでいる。お父さんが「四號のにはとりへ、卵四十八だかせやうか」と僕に言つた。僕は「四號なら四十八はだけないだらう。もしだけるとしても卵はつぶしてしまふだらう」と言つた。お父さんは「では親と리를二羽借りてこやうか」と言つた。僕は「うん」と答へた。そして「何と言ふ家へ借りに行くのだ」と聞いたら、お父さんは「七尾さんの家へ借りに行くのだ」と言つてでかけた。僕もついて行つた。

七尾さんの家の戸口に入ると、お父さんは「今日は」と言つて戸を開くとお母さんが出て来て「何ですか」と言つて、お父さんと僕を、にはとり小屋の方へ連れて行つて呉れた。七尾のにはとり小屋はとても広くて、にはとりが沢山居ました。七尾の母さんが「見て下さい、どちらでもよいのを借すよ」と言つた。お父さんは「お母さんが借すによいのをえらんでから、借りて行くよ」と言つた。すると七尾のお母さんが「このはとりは、だくに上手ですよ、これも上手ですよ」と言つて、とても大きいのを見せてくれた。お父さんは「それを借りて行かう」といった。さうして、お父さんが一羽、僕が一羽持つて家へ帰つた。

すぐ三はらに分けて卵をだかせた。四號のにはとりへ十六個、七尾から借りて来たにはとりへも十六個づゝだかせた。それからすんすん日が過ぎて六月十八、九日目、卵を湯に入れて見たら動く、僕は嬉しくてたまらない。

学校からかへると、お父さんやお母さんに「ひよこ生れたか」と毎日聞いた。もう少しもう少しと言ひ言ひのびた。二十日には、せきあらしが二匹生れたのだらう朝から晩までかはいい聲でないて居る。そのたびに親どりは「こゝこゝ」と言ふ。僕は見たくて見たくてたまらない。お父さんにお願ひしてやつと見せてもらつた。かはいいひよこが二羽ゐて僕を小さい目でにらめている。ぼくはおかしくなつてとうとう笑ひ出した。するとお父さんが「ひよこがおかしいのか」と言つたので、僕は「小さな目でにらめるからおかしくなつたのだ」と言つた。僕が笑ふとひよこは、親どりの中へもぐつていく。寒くなると思つてふたをしてやつた。

二十一日には、四十八羽生まれた。小さな目玉をきょろきょろさせながらないて居る。十五センチの高いところからは飛べない。親どりのせ中へ上つたり、ひよこどうしで目をつついたり、胸の下からくぐつていつたり、しりから出たり、いろいろなことをして遊んで居る。

いつか、お父さんの友達が来て「ひよこをうれ」と言つた。お父さんは二十四羽分けてやつた。おちさんは「どうもありがとう」と言つてかへつて行つた。その時僕はお父さんに「あまりけると、ひよこがゐなくなる」と言ふとお父さんは「半分分けをしたのだ。二十四羽あればいい。お前に二羽呉れるから草をとつて育て、卵をとつてそれを売つて貯金をすれ」と言われた。僕は毎日草を取つてひよこを育てゝる。

今では大きくなつて十五センチのところからはどうどん飛ぶ。

いっぱいの飼育者、生産者です。

「四號のにはとりは卵をみな産み終つて『こゝこゝ』とないでいる」「四號なら四十八はだけないだらう。もしだけるとしても卵をつぶしてしまふだらう」

四號の描写にしても、父との会話にしても、にわとりとの生きたかかわりをもつてゐるからこそその表現です。自分のことばで書かれていて、それこそ、お手伝いの域をこえた確かな生活があります。父親の職業は何なのか、そのことは書かれてはいないので、共同経営者ぶりがほおえましいと言えます。それにしても、卵を抱かせ、かえすまでのいちずき、みごとな執着ぶりはたいしたものです。

書き終わつての見直し、表現の不足、また、文の間違いをなおすなどの「推敲」のしことの足らなかつたのが惜しまれます。

終行の「今では大きくなつて十五センチのところからはどんどん飛ぶ」には、作者ならではのひよことの一体感、その喜びがあふれんばかりです。

焼芋屋 五白 廥谷 雅格

焼芋屋の店先は何時も大人や子供でにぎやかである。昨日僕が買ひに行つたら焼芋屋のをばさんは「さあどいたどいた」と大きな調子のよい聲でいった。そうして今まで釜の前に冷さうな真赤な手を暖めている子供達をおどかしながら焼釜のふたをとつた。釜の中からは白い湯気がもうもうと出たかと思ふとをばさんの顔は何かで包んだようにぼつーとなつて見える。そうした白煙は、ひさしの間からすーとはひ上つて寒い空に消えて行く。をばさんが釜のふたを開けるとすぐに子供達は「をばさんくれよ」「をばさんちょうどいぢょうだい」と皆一錢玉をにぎつて、てんでににぎやかだ。皆がくれよくれよと言つても、中々呉れないので、誰かが「馬鹿見た」と言ふ。するとそばに買ひに来て待つていた如何にもへうきんそうな、大人が「どこで馬

鹿を見たんだ」と言った。すると子供達は「その馬鹿ではないのだ」と口々に言った。そして誰が先とか後とか言い合つて皆釜の中のお芋をみつめてゐる。しかし、をばさんは、さつきから来て待つてゐる子供達には目もくれないで大人の人におせじの様な事を言いながら「一錢や二錢は後だ」と言つてふかふかしたようなお芋を大人の人にやつてしまつた。子供達はつまらなそうにして芋屋のをばさんと大人の人の顔を代る代る見てゐる。僕も腹だゝしかつた。しばらくして、をばさんは残りの小さいのを子供達にやつた。それでも子供達はさつきの不平は何時の間にか忘れたようすに笑顔で「をばさんくれよ」「わたしにもくれよ」と、小いかわいらしい手を出す。中には「おれにもくれよ」、言ひながらひびのきれた、ごそごそした手を出す子もある。僕はそれを見てゐて、僕が若しも焼芋屋だつたら、たとへ子供でもそして一錢でも先に来た者には先にやろうと思つた。子供達は焼いたお芋をふところにしてうれしそうにとんでいった。

(叢書「夢」23号・昭和10年12月発行)

「焼芋屋」の店の前に立つ、がんせない幼い子どもたちを見る作者の観察力の確かさ、ふかさ！ 不正を憎む作者の気持ちが、眼前の子どもとのリアルな描写によって読むものへつよく訴えかけます。

会話が、その子ども、またおとなのかきもちのヒダをまで映し出すすぐれた描写をみせます。どこまでも事実にそつての描写は、その観察力の確かさとで、なんとも鮮明でふかいのです。

中には「おれにもくれよ」と言ひながら、ひびのきれた、ごそごそした手をだす子もある…

作者は、そうした事実のひとつひとつから、自分の思いを強くしていけたのです。

段落のないこと、まだ文のあらっぱさを多少残しているのが残念です。「ひとりの喜びはみんなの喜び、ひとりの悲しみはみんなの悲しみ」…これは北方教育の若い教師たちの実践を端的に示す合言葉（指標）の

ひとつ。文集「歩み」は、北方教育との直接的なかかわりは持たなかつたのですが、同じ時代、くらしをリアルにみつめるまなこは、村にも町にも大きな違いはなかったことを知らしてくれます。

アイヌのおばあさん

五 赤 熊谷貞夫

アイヌと聞けば、すぐ目のくぼんだ、まつげの長い、あごの突出た、こい髪の持ち主：女であつたら、口や手の甲に入れ墨をした、氣味悪い姿を思ひ浮かべます。

ことしの夏、家へ物売りに来たアイヌのおばあさんには、今でも忘れることが出来ない。

おばあさんは、もう六十を越したであろう。

頭はほとんど白く、腰もずいぶん曲がつてゐた。そして、やさしい目で僕たちを見ながら、古ぼけた箱を取り出し、中から糸巻、はしなどを出して、前歯のかけた口で不自由さうに、「どうぞ、これを買って下さい」と何だかへんなふしのついた言葉で言ひながら、箱を僕たちの方へよこしました。

僕は、なんだかかはいさうになつたので、母にたのんで、糸巻を一つ買つていただきました。

するとおばあさんは、ていねいに、おじぎをして、しばらくもじもじしてゐたが、やがて古箱についてゐた荷札を見せて「ここに書いてある旅館の住所を教えて下さい」と聞くので、僕が連れて行つてやりました。旅館の前に来ると「私も年とつて一この旅館あたりを、行つたり来たりしましたよ。」などゝ笑ひながら話しました。

僕が、かへる時、旅館の前で、こっちを見ながら、入墨した手をあげてゐました。

(文藝「歩み」28号・昭和12・12発行)

偏見のない、子どもらしい素直な目で切りとった生活の一断面。

当時、お隣の「朝鮮」から来た人たちが、横手の町にも何家族か居住していました。特に女性（母親）の人はチョゴリ（民俗服）を着ていましたから、すぐわかつたものです。きちんとした職を持てず、「ボロ買い」など廃品回収のような仕事しかなかつたようです。

直接的な武力脅迫下で、日本に併合させられてから、朝鮮の人たちの苦しみがはじまります。ほんとうのことを知らされなかつた当時は、「朝鮮、朝鮮！」と蔑視するばかりでしたから、町かどでチョゴリの人が、「朝鮮！ 朝鮮ト バカニシテ：」と慣れない日本語で泣き泣き訴えるのを聞いたものです。

アイヌの人を外国の人とは言えないと思うのですが、とにかく偏見・差別の強かった当時、作者の体験は貴重です。

「口や手の甲に入墨をした、気味の悪い姿」の先入観念を持ちながらも、しかし、「今年の夏」の実体験を、あれこれの先入観念を交えず、ありのままに、見たまま、感じたままを書きとつています。事実にそつて、そこに心うごかしたことによくみづめとらえていきます。

文のごたごたは、落ち着いて見直しをすればよいのですから。

冬の生活

五青 菓子 卯吉

十二月の半ばをこせばもうどこも真白になる。そしてだんだん寒くなる。僕の家の父母は早く冬が過ぎて暖くなつてくれるといふと言つてゐる。冬になると僕はまづ朝早く起れない。家の人もなかなか起きない。お母さんは赤ちゃんをだいてるので冬はたいへん家の仕事がおそらくなる。そのため僕は時々學校をおくれてしまふ。夜になるとみな小さな妹達はこたつにあたつてこつくりこつくり眠つてゐる。お母さんは六事頃家へ帰つて晩飯の支度をするので七時半頃でないと御飯を食べられない。

夏であればこの頃電気がつくのに今は四時頃もう電気がついてしまふ。僕はお母さんを大へんかはいさうに思ふ。手をみればひびで手がざくざくわれ、血のたつてるときもある。それをみると僕はますますかはいさうになつてくる。さうして毎日水でおしめを洗ひ、さうしてみたおしめを冷めたい手で入れてくる。晝はどんな吹雪でも町へ行く。夜は夜でご飯を食べると赤ちゃんがえづめにはいつてゐておしりが痛いといつて泣き出す。だが母はいろいろな用があつてなかなか赤ちゃんをだかれない。夜の仕事がすんでやうやくだけときは大へん喜ぶ。だから僕はお母さんがこんなに難儀をしてゐることを考へると何んでも母のいひつけを守り早く大きくなつて母を樂にさせやうと冬になれば時々思ふ。僕はちゃわんを洗つたり妹達を遊ばせたりして手助けしてゐる。母のねる時はもう十二時をうつてゐるという有様です。春夏秋はよいが冬になるとこういふやうに家の仕事がおくれる。

（文藝「歩み」31号・昭和14年3月発行）

家の暮らしのこと、母親の苦労・せつなさといったことなど、ふつうそれを前面にとり出して書くなどということは、かなり勇気のいることで、ふつうはそこから逃げ出しますが、作者はそれを正面にすえて書いています。そこがこの綴方のもつともすぐれた点といえましょう。しかも五年生。

この作品をどう評価するか。「上手に書けました」では済まされない問題をかかえます。つまり、作品に書かれた「生活」を、どう評価し、そこからどう指導していくかということになります。

しかし、こうした子どもの生活へまで立ち入ることなど、まったくお手あげの状態であった時代でした。教科書中心主義で、現実の子どもの生活などは見向きもされなかつたのですから。この作品を前に、指導の先生方の喧喧諤諤の姿が見えてきます。どう解決されたか、しかし、文集「歩み」はこの31号をもつて終わつてしまします。

(3) 「調べる綴方」のこと（省略）

* おわりに（まとめとして）

① 童謡と児童詩のこと

文集「歩み」での童謡や詩について、「詩教育運動の発展過程のひとつ姿」としたのでしたが、どうもぼんやり過ぎます。児童詩の歴史としてはもっと厳密にたどるべきでしょう。童謡と児童詩との関係を「生活綴方事典」の《児童詩教育の歴史》の項では次のように記述しています。

…はじめて児童自由詩を提唱したのは「赤い鳥」による北原白秋であった。募集した子どもの童謡作品のなかにふくまれている自由な律動感に白秋が注視したのがはじめてである。「はじめ児童作品のほとんどは、成人作の童謡の模倣であった。即ち調子本位の童謡であった。之等の模倣童謡より一転して、児童本然の感動のリズム、その自由詩の形式を以て現れた作品を見た私の驚愕と歓喜とはどんなものだったろうか」と白秋は「鑑賞指導・児童自由詩集成」(昭和八年・アルブス社)の解説で述べている。

（この項、滑川達夫による）

文集「歩み」19号発行の前年にすでに、北原白秋は児童自由詩を提唱しています。その初期は童謡的児童詩であったのは必然で、後年いわゆる「赤い鳥自由詩風」と呼ばれるようになります。昭和40年頃から、児童詩として全国に広がったとされます。「北方教育」も児童詩を多くとりあげましたが、「赤い鳥」の児童自由詩の作風をふみながら、しだ

いに散文詩風な生活詩を形成するにいたった…とも「同書」にあります。

おわりに、「北方教育」での『童謡と児童自由詩』についての論稿の

ひとつをみておきたいと思います。

…さらに童謡が童心の特質を誤謬して類型的な整調に堕したのに、児童自由詩は童心そのものの自然な表現、形式をとったがゆえに、常に新鮮な形式を創造し、常に児童に生き働くのである。…(略)…

これはかつて、童謡のように形式に拘泥された結果ではなく、常に醇乎たる自由詩的発想、童心の自然さが生まれたものである…。

(「北方教育」第2号・昭和5年4月1日発行。「絶対にやけな文部省の児童自由詩論」須田文藏より)

童謡と、児童自由詩との対比が鮮明です。「北方教育」社の子ども向け「北方文選」誌でも、児童自由詩を子どもにわかりやすいように童詩といつたりしているようです。童謡との決別は、いつ現実の生活に根ざし、その生活感動を端的に表現したものとして「児童生活詩」とよばれるようになつたとされます。

「北方教育」を代表する詩として次の詩があります。

き て き

金足西小 四年 伊藤 重治

あのきてき

田んぼに聞こえただろう

もうあばが帰るよ

八重蔵

泣くなよ

さきに引用した「エンソク」（一白 佐藤就一）は散文詩風児童生活詩と位置づけられていいものと思います。

② 「ありのままに綴らせる」「具体的にくわしく」ということ

さきにも触れましたが、昭和初年頃、綴方の作品研究を通して、秋田が生んだ「北方教育」の青年教師たちによる「新しい子ども観」「新しい生活観」は、教科書主義・公式主義的なこれまでのところからの方々のコペルニクス的転換を意味するもので、綴方指導の大きな指標となつたといわれます。

その具体的な指導のひとつが「生活をありのままに綴らせる」でした。

生活をありのままに綴らせる

そのための第一は、自分と自分のまわりの生活現実を「ありのままに」「具体的に」生活をとらえさせるということは、作文教育のためばかりでなく、教育全体、学問の世界にかかる。……（略）……生活の真実も発掘される。「ありのままに」「具体的にくわしく」は生活探求の端緒であると同時に、綴ることの欠くことのできない方法である。

（『鈴木正之北方教育著作集』

〈著者〉《生活をありのままに綴らせる》 鈴木正之著より）

まるる生活現実のあるがままを、事実に即して、自分のことばで見る、綴ることを通してこそ、きびしい現実に立ち向かう、くじけない生き抜く力をとらえさせたいと『北方教育』の青年教師たちの実践はそこにありました。

喜びの時は喜びを、悲しみのときは悲しみを、怒りのときは怒りを、「ありのままに」出し切る。美しいものと体面したら美しいと、ウソを見破つたらウソと、はつきり言い切る。これが人間らしい人間である。

しかし、感情のひとり歩きはいけない。行動にともなう喜怒哀歎でないかぎり正しい生活感情を浄化することはできない。自立過程、労働過程にあらわれる感動、心の屈折を、その過程とともに綴らせることによって、生きるちかららの糧としていきたい。

（「圖書」）

するどい、新しい「子ども観」「生活観」が青年教師らによつて叫ばれたのでしたが、「冬の生活」の作者までには届かなかつたようです。

「冬の生活」という作品は、時代が書かしめたともいえます。息つくことさえも不自由であったといえるほどの時代は、この作品が示すように、「なぜ」と問い合わせることが出来なかつた時代だつたともいえましょう。暮らしのひとつひとつ苦しい、せつない現実へ、もう一步踏み入ることを許さなかつた時代ー修身主義・心がけ主義にがんじがらめにさせられていた子どもたち！　まさしく「なぜ」のない時代だつたといえます。

たとえば、「冬の生活」の作品では、

「僕の家の父母は、早く冬が過ぎて暖くなつてくれるとよいと言つてゐる。」

「冬になると僕はまづ朝早く起れない。家の人もなかなか起きない。

「（母は）晝はどんな吹雪でも町へ行く」（註 町＝市・町）

などなど、「なぜ」をバネにし、テコにして、もう一度「冬の生活」に生起するひとつひとつを「ありのままに」「具体的にくわしく」書くこと、「みつめなおすこと」で、みえてくる人間の喜怒哀歎をつかみとることこそ、もう一度自分にはねかえってくる。「生きる力・生き抜く力」の生活感動のほりおこし、それを可能にしえるのだといえましょう。

「綴る力（書く力）」イコール「生きる力」となる人間教育！秋田が生んだ「北方教育」は、これまでの修身主義的な教育を否定し、新しい子ども観・生活観をうちたててすぐれた綴方指導を実践したのですが、時代はそれを否定したのです（まだ、それを理解しえなかつたのです）。

大正以来つづいた学校文集「歩み」も、「冬の生活」を書かしめたそのあとは、生まれ出ることをしなかつたのです。つまり、綴ること・書くことをさえ、時代は抹殺してしまったといえましょう。

③ 「冬の生活」の作者／菫子卯吉君について

「冬の生活」の作者（五青／菫子卯吉）について、同級生による「思い出」が記されている一文があります。

最後の「準備場」での思い出

少年飛行兵に志願し、戦死した同級生菫子卯吉君とは、小学一年から高等科二年まで八年間も同級生であった（「準備場」の一年を加えるとすれば九年）。高等科のときは、受け持ちの黒沢頼章先生（後に横手南小学校長）から、たいへん褒められた同級生だった。書道は上手で、柔道は最高強かった。鉄棒は大車輪から何でもやれた人で、先生から、「出藍の誉れ」とまで褒められたほど。なんとしても惜しい人物を死なしてしまって、ほんとうに残念でならない。彼らしい生き方だったとしても、思いだすたびに胸がうずく。

（『準備場』と、われな学校』『回憶』『最後の準備場』より・若林敬一郎 文）

* 註① 「準備場」

高等科二年のあと、「郡立准教員準備場」（一年）があった。最後の「準備場」は、「横手工学校南組」として併立。昭和18年3月卒業と同時に終校。

* 註② 「出藍の誉れ」

藍から採った青色は、藍より青い。弟子が師よりもさり、勝れているたとえ。「出藍の誉れ」＝弟子がその師匠を越えてすぐれているという名聲。（「広辞苑」）

「出藍の誉れ」高かつた作者は、「準備場」在学中（昭17年迄）に海軍少年飛行兵を志願、合格。そのことを伝える、さきの〈回想／最後の準備場〉のなかの短い一文があります。

在学半ば頃、海軍航空機（少年兵）試験を受けに、菓子君と柳沢君とわたしとで大曲に行つたことがあつた。菓子君は合格、柳沢君とわたしは不合格であつた。わたしは近視のためだつた。菓子君の死報は在学中であつたと記憶している。

（『「準備場」といわた等校』（回憶／わだじと準備場）・鎌田光二 文）

年表を追つて時代を走つてみます。

昭和14年（一九三五）	3月	文集「歩み」31号に「冬の生活」が載る。
”	15年（一九三六）	11・20 北方教育同人ら、治安維持法違反容疑で逮捕。
”	16年（一九三七）	12・8 太平洋戦争はじまる。
”	17年（一九三八）	菓子卯吉、海軍少年兵志願、合格。
”	19年（一九四〇）	6・15 アメリカ軍サイパン上陸。菓子戦死。
”	20年（一九四五）	12・24 B29、東京大空襲。
8・15	8・9	8・6 広島に原爆投下。 長崎に原爆投下。 敗戦。

同級生の証言によると、彼はサイパンで戦死といわれます。昭和三年生まれですから、満十六歳の少年を死なせてしまったことになります。

おそらく彼の死は、年表にみられるように昭和19年6月15日かと思われます。南洋諸島の日本委任統治領サイパン島。最前線基地で日米の大激戦地で知られる島内は、トロッコが走るというあまり大きな島ではなかつたと聞きます。戦争はむごいばかり。

広島・長崎の原爆のことも知らず、8月15日の敗戦も耳にすることなく、そして、冬のない南の島に眠っているとしか言えません。胸がうずくのです。

南天にかがやく南十字星も、平和でなくては真に美しいとはいえないでしょう。

④ 文集「歩み」終刊のことなど

文集「歩み」31号（昭14年3月発行）につづく号は発行されていないようです。残されていません。これを裏づける資料もあませんが、やはり、時代が許さなかつたものと思わざるをえません。

「昭和10年（一九三五）、政府が国体名徴に関する声明を発表。衆議院では、「國体ニ関スル決議案」が可決され、昭和13年（一九三八）には「國家総動員法」が公布……「國家」と「忠君愛国」以外の思想はすべて異端とされ、……「生活」「進歩」「改革」などのコトバは遂にタブー。仕事を進めるうえでコトバを失ってしまうほどの悲しみはあるものであろうか。まさに暗黒時代の到来ではなかつたろうか。」
（『北方警報書類と証言』「まえがき」部分の要約）

中央の出版社も相次いで終刊、廃刊が続き、そうした事情を伝える貴重な次の一文が胸をうちます。

：昭和十三年、「国語教育研究」が廃刊され、この終刊号の「豆手帳」に載った次の小文が「白い国の詩(うた)」となつて胸を打つのである。

秋である。

丘陵の竹叢は黄に 山嶺は白く虚空は青い秋である。
軍国の秋に文化の危機である。

独り想え。

虫の音の細く哀しき夜半に、かの戦国の昔、
文化の光が法燈のなかに燃えつぎ燃えつぎした」と
どもを。

そして誓え。

この嵐の中に、次代を育てる文化のバトンを、
われわれの腕から腕へ正しく速く送ることを。

ことばを奪う時代への非運・痛苦の思いが、「豆手帳」氏の一文に激しく燃えさかります。中央での終刊・廃刊にみられるように、昭和13年、ことばを育てる文集「歩み」のおかれた事情にもかさなるものがあったのだろうと考えられます。32号はついに産声をあげることなかつたのですから。しかし、こうした事情については何ひとつ語られていません。ことばを失なった時代は、盲目そのまま暗黒の時代をかけ落ちていってしまったのでしたから。

キネントウ

一年 津浦 昭

ボクノ ニイサンガ ジブンノツクッタ キネントウノ上
ヘノボツテ ミテ、「ヤア アタゴ山ガ スッカリ見エル

ヨ。ムカフノタンボデ タレカ タコ上ゲシテキルヨ。」ト
ヨロコンデキマシタ。ボクモノボッテ ミタクナリマシタ。
上ツティコウト オモッテ 上ルト ズルズル オチテシマ
ヒマス。ナンバン ヤッテモ スベッテ ダメデ ザンネン
デシタ。

(叢「歩み」21号／昭10・3・22)

学校記念日を祝う雪の塔——「キネントウ」の一文。高学年が造った大きな高い雪の塔です。自分のニイサンがそれに登っているのですから、どうせん自分も登ってみたい……けれど、ズルズル オチテシマウし、ナンバン ヤッテモ ダメなのです。

したことを、した、した…と順序よく綴られていて、「ザンネンデシタ」で終わる行動と気持ちのしぜんな結合に、一年生らしい至純の心がみえてきます。綴ることで、書くことで生き生きしいことばが育てられるのです。

雪 ふ み

四 白 小川 正太郎

今朝起きて見ると、雪が一ぱい降って居ました。僕は道をつけやうとしました時、後の方から「どこへ行く。」とお母さんが言ひました。僕は「道をつけに行く所です。」と言ひますと、お母さんは障子をしめました。雪は一ぱい積つて居ました。雀が柿の木の枝から枝に飛び移る度に、枝の雪が、バラバラとこぼれて居ました。一ぺんふんむと、もう汗が出て来てポカポカ暖くなつて来ました。まだすっかりふめないのでもう一回ふみ直さうとしました時、雪が僕の頭へかゝつて體へ入りました。思はず「ひや。」と叫びますと、後に居た妹が「あら、おどろいた。」と言ひました。それからすっかりふんで家に入り、神様をおがみました。「今日もけがのないやうに。」と。それから朝ごはんを食べました。働いた

後は何とも言へないよい気持でした。

(叢「歩み」28号／昭和12年・12・27)

六年間の小学校生活のなかで、口クに勉強もせず、宿題もせずにいた最劣等生が、文集にのることではじめて、たった一回褒められたという記録保持者！ 褒められるということは、からだのオクのオクのところへしづかに」とばのタネがまかれたようなもので、その生涯を支えます。左右もします。

文集「歩み」の、そうしたことばを育てる「歩み」を、時代は奪ってしまったものだったといえましょう。

*註 サキの「『豆手帳』氏」の一文は、『北方教育研究』(第6号・2003年6月10日発行／戸田金二)のなかにある「綴方教育への私的考察」(東北の文花誌『白い國の詩』編集幹・木下耕甫)からの引用です(無断転載を許しください)。

2003年頃、亡くなられた木下耕甫氏は横手市金沢のご出身。小学校の時、受持ちの加藤義男先生から、「きてき」の詩を教わったことが、氏の詩人への道を決定づけたとのエピソードは有名です。

*註 文集「歩み」をたいせつに保管・保存されておられた土屋昭郎氏、柿崎了氏のおふたりにはふかく御礼申しあげます。また、お借りできることにも御礼申しあげます。

文集全冊の写真御協力は小坂良太郎氏です。ふかく御礼申しあげます。

ありがとうございました。

